

# 医家美術展 パツと咲いた個性の群像

第58回医家美術展は11月26日〜28日まで、銀座・ギャラリー悠玄で昨年に続き開かれました。37人から55点、このうち31人が来春の医学会総会ソシアルイベントにも参加します。27日に行われた懇親会では、パソコンにより全作品がスクリーンに投影され、それぞれ自作について語ったり、質問しあったりし、創作意欲が一段と盛り上がっていました。

## 絶妙な色使い、不思議な構図

### 独自の線などなど

短評を昨年と同じく美術部長の白矢勝一氏にお願いしました。なお、掲載作品は誌面の都合により、1人1点に絞らせていただきました(文中、敬称略)。

評 白 矢 勝 一

#### 青山六弥「鬼無里の秋」

朝霧の中で自然の神秘性が感じられる作品である。敷き詰められた白い花、そして林、木々がそれぞれ表情を持ち奥行きを出している。その向こうに続く林、落ち着いた雰囲気の中にこれから芽生え



てくる命を感じさせるすばらしさがある。

#### 秋葉 琢磨「俺達の連山」



力強さを感じさせる大自然をわがものにした大変な水墨画だ。私は佐伯祐三のファンだが彼も日本のかような線に惹かれ、彼独自の絵を描いて行ったのだからこの絵を見て思った。白と黒によってこれほどの迫力がでるとは驚きである。

秋葉 則子 [Sewing Gamma]

ユーモラスな絵である。日常使われる巻尺やはりせんぼんで作られたお人形、表情もおもしろい。やさしい人柄がにじみ出ている人形である。墨絵に新たな趣を添える絵である。



浅谷 浩正 「思い出の人形」

日本人形、これが作られた日本を誇りに思わせる絵である。顔立ちも良く品がある。しかしなによりも惹かれるのはその身につけている着物で、穏やかに黒、黄、赤などがちりばめられ、その日本独自の布の質感がよくでている。



安彦洋一郎 「火花満開」

いくつ火花があるか数えてみた12個だった。安彦先生は手品もされるが、この絵もそんな遊び心が感じられる。いくつ火花があるか中々わからない。火花は夕闇の中で色とりどりに満開に咲いている。先生のお笑顔のようである。



飯田 収 「浅間高原の秋」

秋らしい感じがよくでている。堂々と



した山そこに連なる道が主体である。脇役であるはずの木々がその役割を見事に演じ絵を引き立たせている。さまざまな色彩が使われているがよく調和しおだやかな雰囲気を感じさせる。

江川 政昭 「春彼岸」



先生の水の色はいつ見てもすばらしい。木々の緑が川に映って美しい。緑の木々の連なり、川のくねる楽しい構図である。緑を描くのは難しい。その緑が画面のほとんどを占めている。見事なものである。

榎本 貴夫 「高千穂貞名井の滝」  
美しい滝と荒々しい断崖 その向こう



に何があるのだろう。霞みでしようか、謎めいた不思議な絵である。

海老原隆郎「ノボディー  
ヴィッチ修道院」



薄塗りで自然と建物の調和がすばらしい。青い空、建物、木それを移す水面。青や緑、白これを独特の朱色が画面を引き立てている。すばらしい構図である。

荻野 公嗣 「バレエのレッスン」

二人の少女はこれから踊るのであろう

か。緊張感が伝わってくる。後ろの鏡に



少女の後ろ姿と椅子、窓が配置されている。椅子を小さく描くことにより部屋を大きく見せている。窓から木々も見え優しい教室の雰囲気が漂う。

海野 泉  
「秋の花とフルーツ」



単純化された色彩と構図がとても力強

い。先生は林武を師に持たれたと聞いている。林武は評論家としてもすばらしい文章を書く。「自然に線は無し」という言葉で佐伯祐三の絵を評している文章がある。それを感じさせるすばらしさが、この絵ににじみ出ている。

金古 進「赤城山」

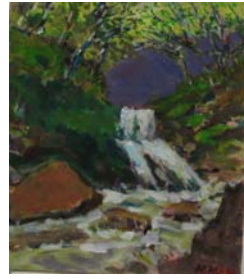


山の表情を絶妙の色使いで描かれその一瞬の表情をとらえている。手前の菜の花畑の黄色と空の青が山の雄大さを讀んでいる

るようだ。

唐澤 信安「初夏の溪谷」

岩の色と形、流れる水。この景色、景色、配置は自然の中に抽象を見るようだ。



流れ落ちる  
小さな滝の  
向こうにも  
思いをはせ  
させる不思議な構図で  
ある。

木内 微子「あじさい」

どういふふうに描けばこのように穏やかな色彩がでるのだろうか。ゴーギャン



はとても頭のいい画家である。  
この配色はゴーギャンの黄色いキリストを感じさせる。作者の内面を感じさせる絵画の本質をついている。

木村 典子「川の要塞」  
朱色の家々がメインとなっている。空

には白い雲が流れ川は斜めに走る、この不思議な構図を支えるのが一艘の舟である。空と川に朱色が溶け合い微妙な調和を醸し出している。パランス感覚抜群の絵である。



調和を醸し出して

楠 登「京の夢 大阪の夢」

タイトルから、この女性は関西に思い



をはせているのだろうか。花やビルは故郷の思い出？女性の表

情がとてもゆたかで、皮膚と服の色がうまく溶け合い、背景のブルーはそれをやさしくつつんでいる。

桑野 茂「ドイツ郊外の風景」

ブルーとグリーンで自然の調和をはかっている。大聖堂、家々、橋、大きな木々、



川と続きそれぞれが独自の色彩を放ち距離感を見事に演出している。それぞれの表情が豊かであるだけでなく大きなまとまりを持っている、すばらしい作品である。

櫻井 實「森深沈」  
木の表情がよく表現されている。この

木は動いているようにも見える。葛は木に這い上がり生命感あふれる風景に色を添える。



せている。

木の後ろに咲く花々、木々、空がこの木を一層大きく見

### 櫻井 寛子「黄ホトトギス」



この絵の前に立つと俳句を読みたくなる人がいるでしょう。やさしい色調で黄色い花と緑が描かれ日本美の美を醸し出している。パシクの色も素敵だ。

### 柴崎 晃「雪解けの頃」



春の兆しを感じさせる絵である。雪が解け始める雰囲気がよく出ている。

雪景色にも関わらず、温かさが感じられる手前の細い木々はこれから緑の芽をふき春を呼ぶ。

### 白幡 雄一「B子像」



B子像まずこの少女の眼と口に入々は視線を向ける。この子はかなりはつきりと自分を主張している。

それが顔以外の手や肩に表れている。作者は

人物の外画だけでなく内面まで描いている。ブルーが画面構成の上で調和をもたらし、緊張感を穏やかなものにしていく。

### 白幡 裕子 「裸」



穏やかな朱、黄、ブルーの色彩の中で、線で描かれた裸婦。画家とモデルの緊張感が伝わってくる。椅子と足の線が絶妙。色彩の形や割合がこの絵のすごいところだ。

### 白矢 勝一「パリジェヌ」

この作品は佐伯祐三の壁に張られたポスターをイメージして描いた。なかなか自分の絵が描けない。佐伯祐三のように黒い線を生かそうと苦心しましたが、多



くが失敗に終わります。絵には構図、色彩など重要なものがあります。自分なりの黒を生み出すには、まだまだ時間がかかります。

白矢けんじ  
「うたたね」

主体の裸  
婦を脇役の  
手前の本や

バックがそれとなく支えて絵を構成している。裸婦の顔がやさしそうで雰囲気よくしている。

鈴木 博  
「更紗」



更紗はインド起源の木綿地の文様染め製品及びその影響を受けてアジア、ヨーロッパなどで製作された類似の文様染め製品を指す染織工芸用語だそうです。この更紗を着た女性の肌の美しさをバックのブルーが引き立たせている。黒い椅子が主体をしっかりと支え全体に落ち着きを与えている。

須賀 功「婦人像」

鼓を膝に婦人は心なしか横を向いている。和服はしつとりと彼女を包んでいる。



しているが婦人の顔の向きによって構図がしつかりしたものとなっている。教えられるところが多い絵だ。

鈴木 啓之「静寂」

帯、和服の色  
彩と背景の茶  
色が響き合っ  
て日本の美を  
静かに表して  
いる。真ん中  
に人物を配置



奥に掛けられた先生の作品は神秘的な感

素材の面白さ  
とマチエールの  
素晴らしさをた  
つぷりと味わえ  
る。黒に近いブ  
ルーの中に主体  
が光を浴びて佇  
んでいる。今回  
も地下の部屋の

じを放っていた。

### 隅坂 修身「旅の思い出Ⅱ」

旅の間の即興のよさがすてきた。人物を囲むパラソルが距離感、空間を感じさせる。人物とともに傾いた。パラソルも絵の面白さを盛り上げる。先生はクレパス



を使って描かれるそつだ。それだと描いても汚れることとはないとのこと。即興で描かれた経験の豊富を不す作品である。

### 高木 實「ひまわり」

力強さが感じられる作品である。花瓶の様相が大胆で花と調和し動きを感じさせる。色彩としては背景にブルー、下部の茶色はヒマワリの黄色と緑を引き立た



### 新本 稔 「スイスの風」



せている。生命感あふれる作品である。

色鮮やかさに引きつけられる作品である。雲に配置されたピンクが湖に混じりブルーの中で絶妙な響きを持たせている。

白色もこれらの色彩の美しさを支える重要な色。そして太い線が画面全体を引き締めている。

### 日高 歐子「好日」

穏やかな季節、こんな風景の中でゆっくりしたいと思わせる絵だ。やさしい色使いで安心感を持たせている。構図がとても面白い。斜めに流れる川、傾いた木、



それと呼応するような舟の向き、どれも響き合っている。川を挟んで、手前と山々との遠近感がよく感じられる。

### 向井 崇「オペラ座の怪人」



アンソールを思わせるシニールな世界をのぞかせている。人々の表情も豊かである。その動きもさまざまである。

日月の輝く夜 踊り続ける不思議な人々。この中にオペラ座の怪人はいるのだろうか、それとも天井から見つめているのか。ブルーと緑の中から音楽が聞こえてきそうである。ユーモラスを感じさせる一枚である。

村山 正則「七五三風景」



この絵は後ろ姿しか見えない。それなのに、子供の表情が浮かんできそうである。小さな子供が手をつないでもらっている。子供  
 の足では階段に足をかけるのも大変だ。それでも一生懸命登っていく。愛情あふれる二人の後ろ姿だ。

安田 和子「静物」  
 瑞々しい静物である。モチーフの組み

合わせに感心させられる。ビンや果物がそれぞれの個性を放ちながら一体となつて画面の中心を占めている。主体



を囲む室内やシャツにも作者の心配りが感じられる。

安田 修一  
 「湯の丸高原の風景」



一度は行ってみたいと思わせるのどか

な山の斜面。手前に咲く花々、ピンクの花が可愛い。そして緑の高原、山、空へと眼は向けられる。幅と距離感を大きく感じさせる一枚。

山崎 嘉弘「テーブル上のカラー」



抽象と具象を併せ持つ独自の世界である。幾何学的な構図の中に主体となる花と花瓶が飛び出してくる。自分の見せたものを見せたいように配置するセザンヌの技法も感じられる。白と黒の両極端



の色、それを穏やかな色彩が包み込む。不思議な世界への入り口のようなのだ。

### 渡辺 晋「金婚式後」

後ろに若かりし頃のお二人が結婚式の衣装で現在の自分たちを見ている。手前の花や文字が喜びを表している。穏やかな色彩の中に長い年つきをしのげる。真真中で画面を切っているがこれが非凡な効果を見せている。この襖を開けると新しい未来が待っている。先生はたくさん本をたさ



れている。  
絵の中にも  
物語がある  
よつだ。

懇親会風景  
スクリーンの絵を  
見ながら歓談⑤ ↓



数年ぶりに白矢先生に勧誘されて、再入会いたしました。地区医師会の仕事やゴルフに忙しく、ごぶさたしておりました。銀座画廊での展覧会は皆さんの力作に胸を打たれました。自作の弁ですが、10歳の娘がバレエに熱中しており、

毎日の練習を大切に

初出品して 荻野 公嗣



隣のバレエ友達のお嬢さんと一緒にモデルをしてもらいました。人気洋画家の池田清明の手引書を参考にしました。大作（80号は初めて）は実力を養うと書いてありましたが、本当にいろいろな勉強になりました。気づいた事柄を忘れないようにして次回作に役立てたいと思います。絵を描くのも他のお稽古事と同じで、

毎日の練習が大切です。暇を見つけてはデッサンやクロッキーを心がけています。

よろしくお願い申しあげます。

お互いよい勉強になりました

懇親会は会期中の11月27日の夜、近くの日本料理店で開きました。パソコンから全作品をプロジェクトでスクリーンに投影、それぞれに技法や色使いなど尋ねあったり、助言したりして3時間近くあつという間の熱いときを過ごしました。写真⑤は事務局を含めた全員。